

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20800050

研究課題名（和文）「配慮<できる>身体」を育成するスポーツ教材についての実践的考察

研究課題名（英文）The Study on the Educational Materials of Sport for Bringing up
“Considerate Body”

研究代表者

田中 愛（TANAKA AI）

武蔵大学・人文学部・講師

研究者番号：10508534

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、「配慮<できる>身体」の育成を目指すスポーツ教材について実践的に考察することであった。シッティングバレーボール講習会への参加を機にチームに加入し、日々の練習や各種大会へ参加することを通して具体的な考察を行うことができた。プレーする人々へのアンケート調査も実施し、シッティングバレーを授業の教材として扱うために有益であり、とくに「座って移動することの難しさ」からは、シッティングバレーに独特の技能があり、それに慣れるための動きづくりが必要であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to consider educational materials of sport for bringing up “Considerate Body”. Especially, sitting volleyball is surveyed. It inquires into the relation of “considerate action in sitting volleyball” and its characteristic movement of body. Finally, the study suggests that sitting volleyball has the capacity to be an educational material that evolves a “Considerate Body”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	960,000	288,000	1,248,000
2009 年度	810,000	243,000	1,053,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,770,000	531,000	2,301,000

研究分野：スポーツ哲学、体育哲学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：シッティングバレーボール、<できる>、身体、カバー、差異、インクルージョン

1. 研究開始当初の背景

シッティングバレーボールは、「障害者スポーツ」の一種目として、いわゆる「障害者」のリハビリや、彼らの生活を豊かにするための生涯スポーツとして誕生した。その特徴は、下肢の不自由な人が座った状態でバレーボールを行うことができる、という点である。しかし、それだけではなく、「座る」という制限を設けることによって「障害者」と「健常者」が同時にコート内でプレーすることが可能である。この点において、他のスポーツ種目以上に教育的な意義と可能性を持つと考えられる。

また、研究代表者の博士学位論文のテーマは「配慮〈できる〉身体」である。この考察においては、「配慮」の行為としての側面と、その行為を生じさせる無意図的な動機としての〈できる〉を伴った身体が示唆された。しかし、「配慮」が単に情動的な「同情」や「憐れみ」の感情とどのように異なるかについては、十分に説明しきれなかった。また、「配慮」そのものについて、その「対象」（何に対して配慮するのか）や「目的」（何のために配慮するのか）が多様であるため、両者を具体的に限定した考察が必要となった。さらに、当研究が実際の体育授業に生じる問題を汲み取り、その問題の解決に資するほどの具体的な考察となるには、さらに実践を視野に入れた考察が不可欠となった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「配慮〈できる〉身体」の育成を目指すスポーツ教材について実践的に考察することである。中でも本研究においては、具体的なスポーツ種目として「シッティングバレーボール」に着目し、その教材としての意義を、運動実践を通して明らかにする。さらには実際の授業を実施することによ

って、具体的な教材化の可能性について考察する。

3. 研究の方法

本研究は以下の手順に従って進められている。

(1)障害者スポーツにおける「他者への配慮」についての検討

(2)プレー場面を分析する観点の明確化

(3)大学体育のバレーボール授業の現状分析

(4)障害者スポーツの実践

(5)大学体育への応用の試み

(1)については主に文献による研究である。

(2)～(5)については、研究代表者自身の実践と、それを踏まえた振り返りの作業となる。

4. 研究成果

本研究の目的は、「配慮〈できる〉身体」の育成を目指すスポーツ教材について実践的に考察することであった。中でも本研究においては、具体的なスポーツ種目として「シッティングバレーボール」に着目し、その教材としての意義を、運動実践を通して考察した。さらには実際の授業を実施することによって、具体的な教材化の可能性について考察した。

20年度には、以下4つの手順で研究を進めた。

(1)「障害者スポーツ」において、「いつ」、「誰が」、「何に対して」、「何のために」 「配慮」しているかについて、実践を通して明らかにする。

(2)シッティングバレーボールのプレー場面に生じている「配慮」を分析するための方法である「現象学的観点からの考察」をより厳密化するため、現象学の文献を講読、検討する。

(3)大学体育のバレーボール授業において、シ

ッティングバレーを取り入れることによって何がどう変化するかの見通しを立てる。

(4)障害者スポーツに関連のある研究領域、活動団体からの情報収集及び意見交換を行う。

(1)については、シッティングバレーボール講習会への参加を機にチームに加入した。日々の練習や各種大会へ参加することを通して具体的な考察が進んだと考えている。特にバレーボールとの相違点（スキル及びルール）が明らかとなり、教材化への下準備ができた。

(2)については、1本の雑誌論文投稿及び2本の学会発表の際に関連文献を収集し検討を行った。しかし、考察方法の厳密化に関してはさらに議論が必要である。

(3)については、大学体育のバレーボール授業について、関係領域の研究会にて報告を行う中で、他の研究者との議論を深めることができた。スポーツ実践における参加者間の技能差は、「配慮（できる）身体」を育成するために不可欠なものであるとの見通しを立てることができた。

(4)については、「車椅子バスケットボール」を社会学的観点から研究する研究者との情報交換を行い、博士論文等の貴重な資料を得ることができた。

21年度には、前年度の研究を引き続き継続し、適宜修正した。内容と成果は以下の通りである。

(1)大学体育の授業へのシッティングバレーボールの応用を試み、改善プログラムを作成するための資料を得た。

(2)シッティングバレーボールチームの練習や各種大会に参加し、プレー場面を撮影しつつ実際に何が生じているかについて分析を行った。撮影に際しては、多数の日本代表選手が所属するチームから、日々地域の体育施設等で練習しているチームまで、幅広く依頼することができた。

(3)プレーする人々へのアンケート調査も実施し、申請者自身の分析の妥当性について検討する補助資料を得ることができた。

21年度に得た資料は、どれもシッティングバレーを授業の教材として扱うために有益であり、とくに「座って移動することの難しさ」からは、シッティングバレーに独特の技能があり、それに慣れるための動きづくりが必要であることが明らかとなった。また、動きが身に着くにしたがって、「できる」「できない」という感覚にも変容が生じることが示唆された。

上記のことは、シッティングバレーがまさに競技スポーツであることを物語っている。しかし、「座る」ことによって、怪我や障害を抱えて参加していることを保留し、「一緒にプレーする」ことを可能とすることも明らかとなった。シッティングバレーは、「すべての人を受け入れるためのスポーツ」と、「競技スポーツ（エリートスポーツ）」の中間点に位置するスポーツであると言える。今後、具体的な授業づくりを継続していきたい。なお、テーマに関わって原著論文を作成・投稿し、現在査読中である。

また本研究を通して、「身体的可能感」という新たなキーワードを着想するに至り、可能感の発達についての分析を研究に追加した。シッティングバレーは「動けないスポーツ」・「動かなくてよいスポーツ」ではない。

「座ること」は「立つ」以外の方法で自由に動くための手段なのである。従って、シッティングバレーにおける段階的な技能習得過程が仮説的に導き出される。徐々に発展する段階は、可能感の崩壊を体験する第一段階、身体運動を再度対象化する第二段階と発展し、ようやく第三段階において「カバー」の行為が見られるようになる。また、この分析からは、動作の習得による「身体的可能感」

の発展が明らかとなった。この可能感が発展すれば、これまで「できない」と判断していたことを、「できる」と判断するようになる。

本研究において仮説的に導き出されたのは発展の第三段階までである。これは、分析者としての筆者がその段階にとどまっていることによる限界であり、この点は本研究で採用している分析方法の限界とも言えよう。今後練習を積むことによって記述内容を発展させ、さらに筆者自身の限界を越え得る研究方法を洗練することもまた、本研究の今後の課題である。同時に、シッティングバレーというスポーツ種目そのものの「面白さ」についても明らかにすることによって、新たな体育教材の開発が可能となるであろう。今後は、バレーボールプレーヤーとシッティングバレーボールプレーヤーにおける「身体的可能感」とチームプレーの成立について、引き続き実践を通して分析を行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

①田中愛、差異を許容するスポーツ実践の探究(2) —スポーツ実践におけるインクルージョン—、武蔵大学人文学会雑誌第41巻3,4号、pp. 410-422、2010(査読無)

②田中愛、差異を許容するスポーツ実践の探求(1) —シッティングバレーボールを手掛かりに—、武蔵大学人文学会雑誌、40巻3号、65-79、2009(査読無)

[学会発表] (計 5件)

①田中愛、セミナー発表「シッティングバレーボールの教材的意義—『競技』と『インクルージョン』は両立可能か?—」、日本体育

学会体育哲学専門分科会定例研究会兼日本体育・スポーツ哲学研究セミナー、2010.3.9、立正大学(東京)

②田中愛、シンポジウム「運動実践は誰のためのものか」—他者と運動実践:「配慮(できる)身体」から考える、日本体育・スポーツ哲学第31回大会シンポジウム、2009.9.6、北海道教育大学(北海道)

③田中愛、体育授業における技能の習得—バレーボールの教材的価値を問う—、日本体育学会体育哲学専門分科会夏期合宿研究会、2009.7.19、箱根静雲荘(神奈川)

④Ai Tanaka, Inclusion in playing sport: A phenomenological consideration about sitting volleyball, British Philosophy of Sport. Conference 2009, 2009.3.27, Dundee (Scotland)

⑤田中愛、シッティングバレーボールの教材化—「配慮(できる)身体」の観点から—、日本体育・スポーツ哲学、2008.9.14、オリンピック記念青少年センター(東京)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 愛 (TANAKA AI)
武蔵大学・人文学部・講師
研究者番号: 10508534

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者